〔吾妻鏡十六〕建久十年〇正治元年三月五日丁酉、故將軍〇源頼朝姫君、號乙姫君、字三幡、自去比御病惱、御温氣也、

〔德川家譜四尾張〕宗春

女子　名富姫

女子　名補姫

〔古事記中開化〕其美知能宇志王、娶丹波之河上之摩須郎女、

〔古事記傳二十二〕郎女は、書紀景行卷に、郎姫此云異羅菟咩と見え、天智卷に伊羅都賣、續紀廿二に、藤原伊良豆賣などもあり、此等に依て訓を定むべし、又舒明紀に、郎媛、孝德紀に娘などもあり、さて男に郎子、女に郎女と云、伊羅は、伊呂兄伊呂弟などの伊呂、又入彦入姫などの入なども、皆同言にして、親み愛しみて云稱なり、

〔日本書紀一神代〕一書曰、以石凝姥爲冶工、〇中略石凝姥、此云伊之居黎度咩、

〔古事記傳八〕伊斯許理度賣命、〇中略度賣は、老女を云稱と見えて、書紀に姥と書り、此字字書に例老母也と有ば記中に、春日建國勝戸賣、沙本大闇見戸賣、志理都紀斗賣などあり、又戸邊とも通し云こと、書紀の己凝戸邊にて知べし、

〔古事記中開化〕日子坐王、娶山代之荏名津比賣、亦名苅幡戸辨、此一字以音

〔古事記傳二十二〕苅幡戸辨、〇中略戸辨は斗賣と同じ、

〔播磨風土記揖保郡〕飯盛山、讃伎國宇達郡飯神之妻、名曰飯盛大刀自、此神度來、占此山而居之、故名飯盛山、

〔續日本紀二十四淳仁〕天平寶字六年十月己未、夫人正三位縣犬養宿禰廣刀自薨、〇中略夫人者、讃岐守從五位下唐之女也、

〔貞丈雜記二人名〕一女の名に子の字を付る事、上代よりの事なり、日本紀欽明天皇紀に云、遣青海夫